

ロバの耳をした王子さま　（ポルトガル）

昔むかし、あるところに、王さまとお妃さまがいました。ふたりには、子どもがいませんでした。それで、とてもさびしく暮らしていました。

あるとき、お妃さまは、三人の妖精を呼んで、男の子をひとりさずけてほしいとしたのみました。すると、九ヶ月して、男の子が生まれました。王さまもお妃さまも大喜びでした。

そこへ、妖精たちが、生まれた子におくり物をするためにやってきました。

一番目の妖精がいました。

「この子は、世界でいちばん美しい王子になるように」

二番目の妖精がいました。

「この子は、世界でいちばんやさしくて賢い王子になるように」

三番目の妖精は、他に何も思いつかなかつたので、

「この子の耳が、ロバの耳になるように。思い上がつて偉ぶることのないよう」 とさけびました。王さまはびっくりして、

「どうか、それだけはとりやめてほしい」とたのみました。けれども、妖精たちはすぐに消えてしましました。そして、王子さまには、ロバの耳が生えました。

王さまは、王子さまの耳がロバの耳だということを、けつして人に知られないようにしようと思いました。そして、特別の帽子をこしらえて、王子さまにかぶらせました。王子さまは昼も夜も帽子をぬぐことはありませんでした。

やがて、王子さまは、美しく、やさしく、かしこい男の子になりました。髪の毛も長くなり、散髪をしなければならなくなりました。王さまは、床屋を呼んでいました。「おまえに、王子の散髪をしてもらいたい。だが、帽子の下に見た物を、だれかに話したら、おまえを死刑にするぞ」

床屋は、王子さまの散髪をすませると、王子さまの耳のことを人に話したくてたまらなくなりました。けれども、もし人に話したら、死刑になるのです。床屋はだまつているのが苦しくてたまらず、教会に出かけて行つて、神父さまに相談しました。

「わたしは、ある秘密を知っていますが、それを人に話したら死刑にすると、王さまがおつしやるのです。でも、わたしは、その秘密を話したくて話したくて、苦しくて死にそうです。どうすればいいでしょう」

神父さまはいいました。

「山奥の谷間に行って穴をほり、穴の中に向かって、思い切りその秘密をしゃべつて、やらん。それからその穴をうめたら、土が秘密をかくしてくれるだろう」

床屋は、大喜びで谷間に出て行つて穴をほり、何度も何度も、

「王子さまの耳はロバの耳」と、穴に向かつていいました。それから穴をうめて、心も軽く晴れ晴れと家に帰つて行きました。

さて、しばらくすると、床屋が穴をうめた所に、葦の草が生えてきました。羊飼いが

その葦のくきを切って、葦笛を作りました。その笛を吹くと、笛はこんなふうに鳴りました。

王子さまの耳はロバの耳
王子さまの耳はロバの耳

たちまち、うわさは国じゅうにひろがつて、みんなが、王子さまの耳はロバの耳だと
いうようになりました。そして、とうとう王さまにも、うわさが届きました。王さまは、
羊飼いを呼んで笛を吹かせました。笛はやはり、

王子さまの耳はロバの耳
王子さまの耳はロバの耳

と鳴りました。王さまが吹いてみても、やはり、

王子さまの耳はロバの耳
王子さまの耳はロバの耳

と鳴ります。

王子さまの秘密を知っている者は床屋しかいません。そこで、王さまは床屋を呼びつけ、

「おまえが王子の秘密をばらしたんだな。死刑にするぞ」といいました。

すると、王子さまが、進みでて、

「どうか、床屋の命を助けてください。ぼくは、ロバの耳をしていても、いつかりっぱ
な王さまになります」といいました。それから、みんなに向かつて、
「さあみんな、ぼくのロバの耳を見てくれ」といって、帽子をぬぎました。すると、ど
うでしょう。王子さまの耳は、もうロバの耳ではなくつていました。

葦笛は、二度と「王子さまの耳はロバの耳」と鳴ることはありませんでしたとさ。

原話：『新編世界むかし話集4 フランス・南欧編』山室静編著／文元社
再話：村上郁